

眠れぬ 夜の夢

脳腫瘍と闘ったある若きナースの病床日記

伊藤ゆきえ

追悼書刊行プロジェクトチーム
リーダー 岸田良平

日総研出版



筆者 伊藤ゆきえ

昭和四十三年一月二十五日宮城県登米郡米山町に生まれ、弘前大学医療技術短期大学部看護学科を経て、宮城県総合衛生学院公衆衛生看護学科を卒業。平成二年春、宮城野病院に入職しリハビリ科勤務。翌三年三月十三日、脳幹部の腫瘍が発見される。二度の入院を経たのち、平成四年七月より貴重な体験記の執筆を開始。去る平成五年七月二十日午前五時十分、長い闘病生活のすえ、二十五歳の若さで永眠されました。

追悼書刊行プロジェクトチーム

リーダー 岸田良平

メンバー 吉田 敦 市川芳嗣

渡辺正見 大友浩平

千葉一之 仁田典子

眠れぬ 夜の夢

脳腫瘍と闘ったある若きナースの病床日記

日総研出版



私たち財団法人日本総合研究所医療看護グループの職員は、五つの理念に基づいて日々の仕事に取り組んでいます。

現在、七つの情報拠点を設け、教育研修・出版・情報サービスを展開しています。

一、私たちは、①教育性のある、②社会性のある、事業を追求した結果として、③収益性もあがる、という発想で現代を力いっぱい生き、将来に大きな夢を持ちつつけています。

一、私たちは、職員一人ひとりが創造性と人間性を高め、さらに潜在能力をも引き出し、なに事も前向きに取り組みます。

一、私たちは、お客様を含めた関係者の能力開発を高めることで、だれもが納得できる価値観、すなわち「本物の企画」を追求しています。

一、私たちは、世の中のため、人のためにつくすことの大切さを啓蒙し、謙虚な姿勢で期待に応える「志」を持った生き方をします。

一、私たちは、①教育研修、②出版、③国際交流、④調査研究の四つの事業活動を通して21世紀に必要な「人づくり」に貢献できればしあわせです。

以上

目次

まえがきにかえて

6

序にかえて

10

眠れぬ夜の夢Ⅰ

13

勇気を出そう／脳腫瘍の発見／父の顔／二度目の入院／日記の中から／クリスマス会
Mさん／眠れぬ夜の夢／生きること／面会人／離れていく人々／マイナスの笑顔より
揺れる心

詩集

111

奇跡／友達／無題①／無題②／無題③／強い人／私にできること

看護婦が患者になった時

131

勤務し一年で脳腫瘍が発覚／精神と身体の苦痛に絶望感／先生の告知で闘う気持ちに
手術後十日目、脳の状態悪化／遠ざけられて隠された儀式
今も残る腫瘍、病状は安定化

手紙

伊藤ゆきえさんから編集部への手紙①／伊藤ゆきえさんから編集部への手紙②
伊藤ゆきえさんから編集部への手紙③／伊藤ゆきえさんから編集部への手紙④
伊藤ゆきえさんから編集部への手紙⑤／伊藤ゆきえさんから編集部への手紙⑥
伊藤ゆきえさんから編集部への手紙⑦／読者からのはげましの手紙①
読者からののはげましの手紙②／伊藤ゆきえさんから土生房枝さんへの手紙
読者からののはげましの手紙③／読者からののはげましの手紙④

眠れぬ夜の夢Ⅱ

かあちゃんと昭雄の死／私の一杯のかけそば／うれしいこと、楽しかったこと
私は二十三歳の女性です①／私は二十三歳の女性です②／Tちゃんへ
パイロット牧場／再度化学療法の勧め／まもなく手術後一年（一九九三年一月）
あたたかな手／Iさんから／回復への喜び

追悼文

二十五歳で死んだ友／風鈴の思い出／なぜ彼女は、あの『言葉』で書いたのか？

追悼書刊行にあたり／あとがき

139

185

283

297

まえがきにかえて

彼女は、私へ宛てた手紙のなかで「書くことが生きがいになっている」「書くことで社会に参加できる」「看護と繋がりを持ち続けられる」その喜びについて語っていました。

この病床体験記も、もともとは本に載せるつもりで書かれたものではありませんでした。入院のため、卒後二年目の教育課題である事例のレポートが出来ない代わりとして、体験記を書くように勧めたのがきっかけでした。

退院後の十二月、彼女は「格好良く書きたくなる迷いもあったが、下らないことも飾らずに書いてみた。だから部長さんが直してください」と原稿を託し、また書く度に送り続けてくれたのです。

それは、あまりにも強烈な内容でした。文章としての表現力もさることながら、そこから滲み出る彼女の『生きる強さ』が何よりも印象的でした。本文中に「苦しい」「つらい」

という言葉は、一つも出ては来ず、ただ事実だけが淡々と書き綴られていました。

一人の患者が体験した事実に対して、こちらの感情が付け入る隙などあろうはずもなく、私には、彼女の文章に手を入れることなど出来ませんでした。

また日頃の印象からは、観察力や指摘の鋭さはあっても、どちらかといえば目立たないタイプ、むしろ自分を表現しないイメージがあっただけに、ここまで自分をオープンにしていることへの驚きも少なからずありました。

そのときの彼女は、まさしく死に直面しており、命が幾月続くのか分からず、『このまま生きられるだろう』という気持ちと、『死ぬのは今日か明日か』という恐怖心のはざまで葛藤を持ち続けていたはずです。あるいは切羽詰まったなかで、自分の全てを表現しようとしたのかもしれませんが。

けれど、それにしても苦しんでいる自分を、平静な目で眺めながら書くという、その強さがどこから来るのか、その理由は分かり得ませんでした。

私自身、二十年以上前に、死ぬ一歩手前の体験をしており、原稿を読む度に、そのときの感情が蘇りました。三段階くらいの経過があり、初めは子供のこと、家のこと、仕事、

自分のつらさに悩まされます。次には子供と別れのつもりで死の覚悟を決め、しかし死の瀬戸際を感じるころには、パニックに陥り、子供も仕事も何もなく、死んでもいいからの苦痛から逃れたい……そういう感情に支配されたことを思い出します。

彼女の文章は、読み手の年齢、経験、特に死に直面したことがあるかどうか、それにより受け取られる深みは違うでしょう。しかし私には、非常に強烈なものとして迫るのです。知人の元看護部長に原稿を見せたところ、ゆきえさんの生きざまに衝撃を受け、絶句し、夢にまで見てうなされたと聞きました。

この病床記は、彼女が看護婦でなければ、医療者を責めたであろう中身も、決して少なくはありません。文章こそ医療者への思いやりでソフトに表現されているものの、かなり厳しい教訓が随所に読み取れます。我々が良かれと思ひ、変わってほしいと思つてしていることが、実は負担になっていくこと。患者が出さない本当の気持ち。患者と家族の問題。告知の問題……告知はしてほしい、でも分かってしまった後の自分の気持ちとの闘いがある……まして彼女には告知された時に、すぐるところもありませんでした。そして夢で悶々と悩んでいたのです。私も迂闊でした。そんな時にこそ、何かをしなくて

はいけなかったのではないか、そう思うと胸が痛みます。職場でも家族でもいい、医療者でも宗教でもいい。でもこの人には何もなかったのです。そういう意味も含めて、この深さを噛み締めて読んでいただけることを願います。

彼女は、この二年を闘い続けていました。それも生きるための闘いです。生きているのはほとんど『氣』だと、彼女自身が語っていました。ある意味では、自分の内にあったものを書き終えたのだと思います。奥深さを読み取ってくれる人が、幾人かでもいいれば、彼女が必死になって綴った想いが報われるように思います。

平成五年九月三日

庄子レイ

（宮城野病院 看護部長）

序にかえて

日本の医療が変わろうとしています。患者サービスやクオリティ・オブ・ライフ、インフォームド・コンセントといった患者本位の医療を推進する上でのキーワードが日本の医療でも広く使われるようになりました。しかし、そうしたアメリカで生まれた患者の権利を尊重する概念が、日本の社会文化の中で理解、認知され、医療の現場で実践されるのはまだ少し時間がかかりそうなのが現実です。

このような状況で医療関係者は勿論のこと、医療に関心のある多くの人に読んでいただきたいと思うのが、ある若き看護婦の病床日記である本書『眠れぬ夜の夢』です。前途洋々たる二十三歳のナースを何の前触れもなく襲った脳腫瘍が、彼女の描いていたであろう人生のシナリオの大幅な書き換えを余儀なくさせました。彼女が死と直面した時に感じたこと、考えたことが感性豊かにその日記には綴られています。看護婦として、患者として、そして二十三歳の女性としての思いを悲観することなく真つすぐに、時にはしんみりと、

あるいはユーモラスに語った心あふれるこの病床日記の記述には、今まさに求められている理想的な医療の実現への大きなヒントが示されているように思われてなりません。すべての患者の胸中には、活字にならないドラマが綴られていることを忘れてはなりません。

伊藤ゆきえさんは平成五年七月二十日この世を去りました。『月刊ナースデータ』に手記の連載を始めてから一年と二ヵ月がたっていました。連載もあと三回で終わり、単行本にする話を始めた矢先のこと、ゆきえさんがこの手記の出版を楽しみにしていたことを思うと残念でなりません。

突然の死の知らせを聞いてから今日まで、この珠稿を一日も早く世に出し、できるだけ多くの人に伊藤ゆきえさんの思いを伝えたいという気持ちに追われてまいりました。

伊藤ゆきえさんのご冥福を心からお祈りするとともに、ご霊前に本書をささげます。

平成五年九月九日

岸田良平

（追悼書刊行プロジェクトチーム）
リーダー

眠れぬ夜の夢
Ⅱ



「Tugaru」伊藤ゆきえ

花の命も愛しい今日この頃、私の枕元には乾燥気味の、花びらがだらんと開ききったチューリップが生きています。花を見る目が変わりました。以前ならちよっとしておれてしまったら、捨てていたような花ですが、今回の手術後は、花も一生懸命生きていることを意識するようになりました。十日前に友人三人から、届けられたこのチューリップは、見た目ははっきり言って良くないのですが、毎日水を取り替えてあげると、確実に水を吸い込み、生きています。四方を山や畑に囲まれた家で生まれ育った私は、草木や花が生まれ、育つ過程をずっと見てきました。こんなにたくさんの草木や花に囲まれて、どうして私はこれらの生命の強さ、尊さに気が付かなかったのでしょうか。枯れた草木の美しさは、無意識のうちに知っていたはずなのですが。今ではあの美しい絵を口で描く星野富弘さんが、花に執着する気持ちがよくわかるような気がします。

退院の日、私が一年間働いていた宮城野病院の看護部長にお会いしました。前回七月に退院した後、看護部長に入院体験レポート（勇気を出そう）を提出しました。そしてこの日お話し、あらためて私はとても貴重な体験をしていることを意識しました。看護婦、保健婦の学校で学び、たった一年ですが看護婦としてリハビリ科で働いてきた私が、脳幹部

の腫瘍を発見されたのは二十三歳。ちょうど今日三月十三日で一年経ちました。今は二十四歳。確かに、やれと言われてもそう簡単には経験できない貴重な体験です。

二度の入院、開頭術。放射線治療、化学療法を体験しました。この体験を通して、たくさんさんのことを学び、気づき、たくさんさんのことを考えさせられました。個人的に私の気持ちを知って欲しいという思いと、看護部長がおっしゃっていたように、働きなくても、こうやって自分の体験を記し、読んでいただくことで、みなさんの看護に活かされるのならと思いい、書いてみました。下書きもせず、ただ書きたいこと、言いたいことを、ワープロに打ち込み、また書きました。一年ぐらい前に購入したワープロで不慣れな上、誤字、脱字も多いかもしれませんが、読んでいただき、一つでもお役立ていただくことがあれば幸いです。